

「有言実行」

「登」米高を卒業するときに宣言したインカレ優勝の目標を、ようやく達成できてほっとしている」と、白い歯をのぞかせた。

「第56回全日本学生カヌースプリント選手権大会（通称、インカレ）は9月18から22日まで、木場潟カヌー競技場（石川県）で開かれ、鹿屋体育大学（鹿児島県）4年の橋沼新さんがカヌースプリント競技男子カヤックシングル200㍎で優勝。日本一に輝いた。

橋沼は、小学時代に地域スポーツクラブの事業でカヌーと出会い、登米高でカヌー部へ入部。高校トップクラスのスタートダッシュを武器に、全国総合体育大会、国民体育大会でそれぞれ3位に入賞するなど、全国の舞台で活躍した。それでも、各大会の決勝では、得意のスタートでバランスを崩すなど、満足のいくレースを展開できず、不完全燃焼で橋沼の高校生活は幕を閉じた。登米高卒業後は、部活の監督であり恩師でもある工藤大将先生の母校、鹿屋体育大学への進学を決める。卒業時、工藤先生に誓った目標は「インカレ優勝」。大学日本一の目標を胸に、鹿児島への足を進め入れた。

大 学入学後、最初のインカレでは、1年生ながら決勝へ進出。実績ある全国の強豪たちに割って入り、5位入賞と奮闘を見せる。「1年としては良い成績を残せて自信につながった。翌年の優勝を目標に練習

へ励んだ」と、インカレ優勝が手の届く位置にあることを確信した。

1年の12月、ロンドン五輪カヌー男子カヤックシングル200㍎の金メダリスト、エドワード・マッキーパー氏が来日。鹿児島県で開催された講習会に橋沼も参加した。同じ短距離を主戦場とする金メダリストから、直接オールを使い方などをレクチャー。共に参加していた選手たちとの交流にも刺激を受け、直後に200㍎の自己ベストを更新。自信を胸に迎えた2年のインカレだったが、他選手の好成績に阻まれ、まさかの3位。翌年、3年では2位と、好成績を残すものなかなか表彰台のてっぺんに立つことはできない。入賞のうれしさよりも、自分より上への選手がいる悔しさに苛まれた。

高 校時代からの武器であるスタートダッシュが持ち味である反面、レース後半の失速が橋沼の課題。絶対に負けられない最終学年のインカレに向け、上半身の持久力向上に取り組む。バトルロイヤル（綱引きに使うような強度のある綱を持って、波打たせるように振るトレーニング）を取り入れ、地道に上半身強化を目指した。

9月。大学最後のインカレを迎えた。例年なら複数競技へのエントリーが可能だが、今大会は新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、各選手1競技のみに制限された。短距離を得意とする橋沼は、カヤック

シングル200㍎でエントリー。予選、準決勝と危なげなく通過する。今までのレースでは、後半に腕がばんばんに張って失速していたが、上半身強化の効果もあり、スピードを維持したままレースを展開していく。

ベストコンディションで迎えた決勝の舞台。登米高時代に立てた「インカレ優勝」の目標。有言実行のラストチャンスに臨む。

スタート直前、初優勝へ意気込む橋沼に違和感が。カヤックの役割をラダーが、真つすぐに固定されていなかった。すでに水上でスタートに向けてスタンバイしていた状態のため付け直しはできない。そんな橋沼を尻目に、スタートのプザーが鳴り響いた。いつも通り漕ぎだすと、レーンの端にカヤックが傾く。「不備に気付かなかった後悔はあったが、焦りはなかった」と、いつもと勝手の違うラダーの感覚にも冷静に対応。4度目の決勝の舞台。今まで積み重ねた経験が橋沼を後押しした。1位で漕ぎ切った橋沼の耳にゴールのプザーが響く。宣言通りインカレ優勝を達成した。

「高校時代、工藤先生に言われた『新ならでできる』の言葉があった。ここから来た。今度は、バリ五輪が目標。自分が活躍する姿をお世話になった方々や母校の後輩たちに見せたい」。

次なる有言実行に向け、橋沼は失速することなく突き進む。



インカレで念願の優勝を決め、ガッツポーズをする橋沼

鹿屋体育大学4年

橋沼 新

第56回全日本学生カヌースプリント選手権大会
カヌースプリント競技男子カヤックシングル200㍎ 優勝

HASHINUMA Shin

1999年1月16日、中田町長崎生まれ。登米高在学時、全国総合体育大会カヌースプリント競技男子カヤックシングル200㍎3位、国民体育大会同競技3位、同大会500㍎5位の成績を残す。卒業後、カヌー競技の強豪・鹿屋体育大学へ進学。身長166㍎、体重80㍎。ベンチプレスの自己ベストは160㍎。趣味は筋トレと釣り。